

# 文集

(頒布版)

搜真女学校

2021

## はじめに

島名恭子

五年前から「国語表現」という中学一年生の科目を担当している。多岐にわたる国語の学びのうち、「話すこと」と「聞くこと」に重点をおいて学ぶ科目である。

その授業で中一の生徒と「言葉」の力や働きについて学びながら、私はふと考える。「黒板は何色なんだろう。」皆さんには何色に見えるのだろうか。「緑」「深緑」「濃い緑」「モスグリーン」……。いや、私が考えるのはそういう、色を表現する「言葉」の数や種類のことではない。そうではなくて、「黒板は緑色です。」と答える二人の人がいたとしても、その見ている色が全く同じ色なのかどうか、言っている本人同士でさえ確認しようがないということなのだ。屁理屈と言われればそれまでだが。

私たちは唯一無二の存在である。だから物の見え方も考え方もひとりひとり違う。もしかしたら、私が見ている緑色と、あなたが見ている緑色は違う色なのかもしれない。でも、それは「緑色」として私とあなたの間には存在する。「言葉」がそう決めているのだ。全く違う存在である私たちを結ぶものとして「言葉」は存在している。

だからこそ「言葉」を丁寧に扱いたい。私に今、伝えられている「言葉」に込められた思いや意味を細やかに受け止めたい。そう思う。

文集に収められた作品の著者が、読者である私たちに伝えようとしているたくさんの「言葉」。そこから私たちは何を受け取るのであろう。味わいつつ読み進めたい。

文集 第四十七号 目次

〈中学部〉

◇作文

一年

明るく輝く星空を……………(1)

「少年の日の思い出」をエーミールの立場から書く……………(2)

二年

白い埃はキラキラと……………(4)

涙と罪……………(5)

三年

いつも同じ……………(7)

空も飛べない私だから……………(8)

〈高等学部〉

◇作文

一年

祖父の新鮮な記憶

.....

(10)

失態の味

.....

(11)

二年

一言。

.....

(13)

夜明け

.....

(15)

三年

作文文化

.....

(17)

描く

.....

(18)



中学部一年

明るく輝く星空を

瞬きはしてはいけない。だって一瞬の事だから。願い事なんかできない。だってあつという間に消えてしまうから。首が痛くてもじつとがまん。空をずっと見つめる。期待しながら見つめる。

暗がりの中、寒さに負けないようにキャンプ用の寝袋と、リラックスできるイスをベランダに準備したのは去年の十二月十四日。私にとって記念日になった。ふたご座流星群がよく見えるとニュースで見たのが十三日。その日は雲が多くてあきらめた。次の十四日も雲が多かったが段々と晴れていったので、これはチャンスかもしれないと、寝る前にあわてて準備した。月明かりが邪魔していたが、星がよく見えてきたので期待して待った。まじり目に入ったのがオリオン座。次に、その少し下あたり、冬の一等星で一番好きなシリウスが見えた。青白く輝くシリウスは、冬だからいつもさみしく見える。シリウスに優しく話しかけているような傾くオリオン座、

この位置関係が好きだったな。そう思いながら、じつと空を見つめ続けた。

すると、シリウスよりも青白く大きな星が、静かに右から左に流れた……流れてすぐに消えてしまった。願い事を三回も言えない速さでびつくりした。生まれて初めて見た流れ星。ずっと、見たかった流れ星。本当に流れ星ってあるんだ！ と、驚きと同時に、心が夜空と同じように晴れ、幸せな気分になった。もっと見たい。と、その後も空を見続けていたら、また流れ星。さっきとは違う流れ、左から右上。これもまた、流れてすぐに消えてしまった。ああ、本当にきれいな、心が幸せでいっぱいだ。他の人も見られたかな？ こんな気分になれる流れ星、たくさんの人に見てもらいたいと思った。

流れ星やきれいな星空を見るには、街灯が多い都心から離れた方がよい。街灯がほとんどない、山や海のキャンプ場の夜空は、とてもきれいな。こんなに星があるんだな、とキャンプ場で初めてきれいな夜空を見て思った。空全体が天の川のようにキラキラ輝いていて、ずっと見ているとあきない程。いろんな大きさの宝石を誰かがこぼしたみたいに、キラキラが散らばっている。そんな夜空を見ていると本当に幸せな気分になれる。なんで家からはこんな風に見えないんだろうと家族で話したときに、街灯の多さが理由の一つと知った。街灯は夜歩くと

きにあると助かる大事なものの、人が大勢住む町は、家の灯りもたくさん。夜遅くまで起きているとその分、灯りをつけ続ける。生活のため必要な灯りだけど、きれいな星空をみるためには、無いほうが良い。

輝く満天の星空、心がパアッと明るく幸せな気持ちになる流れ星。たくさんの人に見てもらいたい。私も毎晩そんな星空が見たい。いきなり、灯りを消す生活をしよう、なんて言えないしできないけれど、例えば月に一回とか、十分だけとか、時間を決めて、灯りをなるべく消す日、「星空の日」のような時間があると良いなと思った。そんな日があったら悩んでいる人、悲しい気分の人、困っている人、そういった感情の人達が、流れ星と同じ様に一瞬でもいいから幸せな気分を味わえたら、少しでも心が軽くなるかもしれない。夢や目標がある人、何かを頑張っている人、頑張ろうとしている人、そういった人達は、更に前向きになれるかもしれない。

空をずっと見つめる。期待しながら見つめる。暗い夜空ではなくて、明るく輝く星空を。

中学部一年

### 授業内課題

ヘルマン・ヘッセ

「少年の日の思い出」をエーミールの立場から書く

僕の父は教師だった。だから周りが求める優秀な僕でいなくてはならないと思ひ、完璧を目指した。でも賢くなるにつれて学校では他の子たちの趣味などが幼稚に思えてきて、友達が一人も出来なくなっていた。だが、蝶集めだけには僕も熱中することができた。初めてともいえるその何かに打ち込むという感覚に酔いしれ、僕は昼も夜も蝶について勉強し、展翅の仕方や羽の再生方法など片っ端から研究していった。

そんなある日、隣の家に住む彼がこの辺りでは珍しい青いコムラサキを捕えたと聞いた。彼はコレクシヨンの設備こそ良くはないが、捕えるのは上手だった。ただ彼の蝶の扱い方には少し思うところがあるが、彼にとつてそこは気にすべき点ではないのだろう。そして出来ることなら彼と友達になりたいと思っていた。次の日、彼は噂のコムラサキを僕へ見せに来た。始めは本当に凄いと思っていた。だが見ていくうちにいくつかの欠陥を見つ

けてしまった。僕にとつては重要なことだったから、ついでに口調で批評してしまった。彼がこんな言葉求めていることなどわかつていたのに、考えとは裏腹に口からは彼を傷つけるような言葉ばかりが出てしまった。もう一度彼が見せに来た。そんな僕を傷つけるような言葉ばかりが出てしまった。そんな僕の気持ちも虚しく、彼が僕に蝶を見せにすることは二度となかった。

それから二年経ったある日、大切にしてきたクジャクヤママユの蛹がかえった。父さんに呼ばれた僕は一旦蝶を展翅板に留め、部屋を後にした。しばらくして部屋に戻り、早く展翅を完成させようと机に向かった。だが、次の瞬間目に入ったクジャクヤママユの惨状に絶句した。いくら僕の技術をもってしても取り繕うことなど不可能。わかつていても自分の持つ知識を総動員して再生を試みたが、結果は散々だった。そんな時だった、彼が訪ねてきたのは。彼もクジャクヤママユを見に来たのだろう。僕が事の一部始終を話すと、彼は見せてくれと言った。僕は蝶のある部屋へと彼を案内した。その後、僕は彼が後悔と悲しみの入り混じったような顔をしながら放った言葉に耳を疑った。「僕がやった。」怒りを通り越して呆れてしまった。嫉妬でやってしまったのだらうか。彼は蝶が好きなのではないのか？ 僕の知っている君は何だったんだ。「そうか、そうか、君はそんな奴だ

ったんだな。」そうして僕は彼を突き放してしまった。

だがその後彼の妹たちに彼が嫉妬心ではなく蝶に対する熱意が強過ぎたがためにおこってしまった事故だということを知った。それなのに僕が彼の弁明すら聞かずに冷徹な態度をとったから、彼は蝶のコレクションを全て潰して、収集の熱意も失ってしまったというのだ。僕は彼から蝶を奪ってしまったことを後悔し、一度起きたことはもう償いのできないものだということを悟った。そしてせめてもの償いとして、僕は自分の蝶を一つ一つ取り出し、指で粉々に押しつぶした。





## 白い埃はキラキラと

子供の頃からキラキラしたものが好きだった。それはもう、家族でゲーセンに行つて、

「これで遊んでおいで」なんて二百円でも渡されたら、UFOキヤッチャーの馬鹿でかい景品なんかより、下敷きになつているやつ。あのプラスチックのキラキラ、安っぽい宝石、あれが欲しかった。手に入れたキラキラをちっぽけなカンカンに詰めては、時たまこじ開けて一人愉悦に浸っていた私。そんなこと、今でも鮮明に思い出せるのに、それはもう十年くらい前の話。

——「ゴツゲゴツツコオオオー!!!」  
うっ、うっ……うるせえええ!!! あまりのうるささに耳がひん曲がりそうになつた。携帯を見ると朝六時。なんなんだよ私。なんで冬休みだつてのにこんな早朝にアラームをかけたんだよ。この阿呆。天国のような私の睡眠が、悪魔みたいな昨日の私に妨げられたことに憤怒しながら私はアラームを叩き切つて布団にぶつ倒れた。二度寝である。そこから一時間後、また鳴つた。もはや苛立ちを超えて虚無状態だ。無言で私の指は流れるようにスヌーズボタンへと滑る。その時、一瞬見たのだ。

今日の日付、一月六日。

「ッ?!、今日友達と遊ぶんだっ……!!!」

私は跳ね起きた。天使だ、昨日の私は天使……。きつと死ぬほど寝起きが悪い私のために二回もアラームをかけたんだ。なんで一度目が予定より一時間も早いのかは知らないけれど。慌ただしく身支度をしている時、ふと外を見ると雪がちらついていた。でも、気分が上がつたのはほんの一瞬だった。

(どうせすぐに止んで溶けてぐちゃぐちゃになるんだろう。東京こくの雪なんてそんなもんだ。)

私は歩きづらいべちよべちよの地面を想像してゲンナリしながら傘を引つ張り出した。

「朝、目が覚めた時に、ワクワクしたのはいつが最後だった?」

一瞬、頭の中に響いたこの言葉。くだらない。もう出なきゃ。

友達との宴は、それはそれは楽しかった。実際宴という程ではないが、一時だけ「このご時世」、こんな言葉を忘れられるくらいには。すぐ止むと思つた雪は、予想に反して積もっている。駅につくまでに見た白い景色に白い雪。それはとても綺麗だったが、やっぱりそれ以上の言葉は出ないのだ。帰りの電車の中、ゴトンゴトンと揺れながら私の頭にはたった一つ。朝に響いたあの言

葉。あーあ、認めたくなかった。認めたくなかったけど  
凶星だな。いつからか私の好きだったキラキラはガラク  
タにしか見えなくなっていた。あのカンカンも埃なんか  
被ってる。それで気づいた。朝起きた時、私の視界がキ  
ラキラしなくなったことを。本当はとくに気づいてい  
て。朝のアラームを早くかけることだって何度目だろ  
う。明日の朝は早起きして絵を描いたり、ホットケーキ  
を焼こう、なんて妄想を膨らましては、毎朝撃沈してい  
るのだ。そうだ、私はどうの昔、キラキラを見た時のあ  
の感覚をずっと探していた。でももうそれは無理だな  
と、私はマスクの下で苦笑して、あのアラームも消して  
しまおう、そう思いながら電車を降りた。空は、とうに  
真っ暗になっていて最初に目に入ったもの――。

それは雪だった。東京という薄汚い夜空、ギラギラし  
た雑居。それにふり積もった真っ白の雪だ。昼間の、美  
しいとか、綺麗だとかでは片付けられない夜の雪。カラ  
フルなネオンに覆いかぶさり、今でも空から落ちる白  
は、まるで宝箱をぶちまけたみたいだ。ああ、これか。  
この感覚だ。踊り出したくなるような、歌い出したくな  
るような。

たまらなく、底なしの。

その日私は、十年前のキラキラをこの目に取り戻した  
のだ。

「今年は何んと、四年ぶりに積雪十センチを上回った、  
東京都心――」

ニュースを横目に私はスマホを操作する。

ああ、冠雪をもう一度見たいと、また朝六時にアラ  
ームをかけようなんてそんな！

中学部二年

## 涙と罪

公園の木の傍で、お母さんに背中をさすられながら泣  
きわめく彼女。少し離れた所にいる私とその隣にいるも  
う一人の友達が、やってしまった、と後悔するのは目の  
前の光景を理解する三秒後である。

鬼ごっこか、木登りだったか。もう覚えてないけれ  
ど、たしかそんな遊びをしていた。幼稚園から一緒の幼  
なじみである親友と、小学校三年生で同じクラスになっ  
た友達と。私と友達は遊具の陰に隠れたり木に登ったり  
して、追いかけてくる親友から逃げていた。必死に私達  
を捕まえようとするも、ギリギリのところまで逃げられ悔  
しそうにする親友を見て、ちよっとした優越感に浸って  
いた。捕まってしまうかもしれないという緊張と、絶対

に捕まらないという自信が合わさってドクドクと心臓が音をたてていた。ちょうど友達と同じ木に登って、親友の「待つてよ」なんて言葉を手から左へ流していた。私と友達はいつになっても私達を捕まえられなくて悔しそうにしている親友が面白かった。二人で顔を見合わせ、クスクスと笑ってみせた。私達からしてみれば、その笑みはただの笑みで、悪意も何もない。でも、彼女からしてみれば悪魔のような笑みだったのかもしれない。二人がかりで自分を見下ろして、嘲笑って。悲しみや苦しみ、恐怖や憎悪が膨れていって、彼女の中で何かが弾ける音がした。大きな瞳に涙が滲んで、やがてぼろりとこぼれ落ちた。一度涙をこぼしてしまえば邪魔するものはもう何もなくて、年相応に泣きじゃくった。愛娘の泣き声を聞いて駆け寄ってきたお母さんが、ゆっくり彼女の背中をさする。その手はとても温かく優しさに満ちていて、彼女の母の愛を感じた。一緒に遊んでいただけなのに、友達が急に泣きだして頭の中がハテナでいっぱいだった私達も、自分達が泣かせてしまったんだと察した。友達を泣かせてしまったという罪悪感が私の身体中に巡って行って、心臓の音は先程よりもずっと大きく速く、血管を流れる血は熱くて燃えそうなほどだった。鼻がツーンと痛んで、ああ私も泣いちゃいたい、なんて思う。隣から、「どうする、謝る？」という声が聞こえて

きてハッと我に返る。謝るか、謝らないかの二択をつきつけられ、おそろおそろ前者を選んだ。二人でそっと地面に降り、大きな音をたてないように慎重に彼女の元へ行く。

「あの……ごめんね。」

他に言う言葉が見つからず、ごめんねの四文字を口にした。

「なんで謝るの？」

顔を合わせられずに足元に向けていた視線を上げる。彼女は涙の跡が残っている顔で、さも不思議そうにこちらを見つめていた。

あの日のことはこれくらいしか覚えていない。結局、彼女が泣いた理由すらも聞けずに終わってしまった。私達が原因で泣かせてしまった訳ではないかもしれない。でも、ふと目を閉じるとあの日の罪悪感が押しよせてくる。記憶の奥底にこびりついて離れない。私はあの日、人を泣かせてしまうことの恐ろしさを身をもって感じた。こんなにも罪悪感で満たされるなんて、と。学校の先生が言う人を傷つけてはいけません、という言葉よりもずっとずっと効いた。

もう泣かせたくない、笑っていてほしい。私が罪悪感にのまれたら嫌なもの。そう思いながら、あの日の公園を通り過ぎた。ああ、つくづく私は自分勝手だ。

## いつも同じ

コツン、と音がした。もうこんな季節か、と思いがながら私はスノードームを机に置いた。

クリスマスが近くなると一気に私の家は華やかになる。ツリーはピアノの前に、リースは玄関、トイレには一つだけオーナメントをかざり、机にはスノードームを置く。

このように、物一つひとつを決まった位置に置くというのが私の家のルールだ。そのせいも、小さい頃から変わらずにある机の上のスノードームは、クリスマスに対する胸のときめきを思い出させるものだった。

「おやすみ、また明日。」と言って母と妹が寝室へ行ってしまうと、私は一人、リビングに残った。

いつもそうだった。母と妹は二十二時を過ぎればもう寝ていて、私は勉強や明日の準備をした後、遅れて布団に入る。

いつもと変わらなかった。私は机にノートを広げて宿題を始めようとした。すると、机の上のスノードームが目に残ったので、なんとなく逆さまにして、雪を降らせた。全て落ちてしまうと、もう一度逆さまにした。こ

れといった理由はないのだが、ただこの一連の動きをしなから、降ってはやむ雪を見つめていた。

いつもと同じように思えた。降っている雪は、ニュートンが発見したらしい重力に逆らいもせず、落ちていた。

しかし、いつもと異なってしまった。突然、雪が降りやまなくなつたのだ。スノードームの中を、雪がおどるように舞い続けるのだ。雪がおどり続ける中、スノードーム内の天使は、じっと私を見つめながらほほえんでいた。

いつにも増して静かだった。後ろにある時計が時を刻んでいるのが分かるほど。時間は確かに進んでいるのだと訴えかけるように、一定の「チクタク」という音が部屋を支配していた。

不意に、寒気を感じた。夜も更け、タイマーをかけていた床暖房が切れたのだろうか。寒さは私の足先を伝い、私の体温を奪ってきた。それでも雪はやむことを知らず、天使の向ける眼差しは、私に向けられていた。

いつも違う、何かがおかしい。そう思った時、遠くから母の声が聞こえた。開けていたはずのまぶたをゆつくり開けると、まぶしい朝の光が部屋を照らしていた。

いつもと同じようで、少し違う。そんな一日が始まるうとしていた。机に置かれたスノードーム内の天使の羽は、太陽の光で一段と美しい輝きを放っていた。

## 空も飛べない私だから

幼い頃、私はカメレオンになりたかった。体の色を変え、周りに染まる。そんなカメレオンに私はなりたかった。

ライオンにもなりたかった。強くて大きなライオン。それならどんなことが起きても堂々としていられると思っただ。

小学生になると、「悩み」を知った。友達とのトラブル、勉強、字のきれいさなど今まで無かった問題が起こった。そんな時、空高く飛ぶ鳥になりたかった。翼を大きく広げて空を飛び、暗い気持ちなんか吹き飛ばしてやりたいと思っただ。

そんなことを思っても、結局私は人間だった。昨年の秋、祖母が亡くなった。

私は泣いた。沢山泣いた。先生から知らせを聞いた時、家へ帰るまでの道のり、祖母の家へ向かう飛行機の中。本当は泣かないように、カメレオンになって周りの人達のように平然としていたかった。しかし私はカメレオンにはなれなかった。学校からの帰り道、飛行機の中でもただ一人、私だけが泣いていた。カメレオンとは反

対に私は目立っていた。

葬儀の日はずっと端の方で座っていた。ろくに挨拶もできず、ただ泣いていた。そんな私の姿はライオンというよりもライオンに狙われ、おびえているうさぎのようだった。

私は鳥ではないので空が飛べない。鳥が気持ち良く空を飛ぶようには、私の心はすぐに晴れてはくれなかった。今でも時々、祖母が亡くなったのは嘘ではないか、電話をかければ今までのように優しい声で返事が返ってくるのではないかと思っただ。

私は二ワトリになりたい。三歩歩くと物事全て忘れることができるような。時々、祖母を思い出して辛くなる。佐賀県に住む祖母とはコロナが流行してから一度も会うことができなかった。それからは週に一度ほど、電話越しで祖母に会っていた。学校であったこと、家族のことなど、お喋りが大好きな祖母とは一度電話をかける。と毎回、二十分以上話していた。最後には必ず「またね。また会いに行くからそれまで元気しててね」と言っただ電話を切っていた。

最後の電話は祖母が入院する前日だった。学校で期末試験があり、しばらく祖母には電話をかけていなかった。期末試験も無事終わり、家庭科の授業で私は賞を取った。それが嬉しくて、私は一番に祖母に伝えようと思っ

い、電話をかけた。

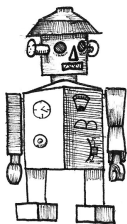
いつもより電話にでるのが遅かった。しばらくして祖母がでたので「あのね、今日ね」と早口で語りかけた。しかし返事は返ってこなかった。「おばあちゃん」と少し大きな声で言うと、電話の奥から祖母だと思われる声が聞こえた。呂律が回っておらず何と言っているのかわからなかった。私はすぐに受話器を置いてしまった。祖母はもう長くないと思ひ、涙が止まらなかった。

祖母が亡くなってから、私はとても後悔していた。学校での出来事を伝えられなかったことも、祖母にもっと電話しなかったことも、最後の電話で「また会いに行くから元気でね」と言えなかったことも。こんな私で、祖母が怒っているかもしれないと、全て忘れてしまったかった。

ある日、母が「おばあちゃんに出会えて良かったね。李歩はおばあちゃんが大好きだったもんね」と言った。私にはその言葉が祖母からの許しの言葉に聞こえて涙が溢れてきた。

今までの出来事なんて消し去りたいと思っていたが、辛いことも祖母との大切な思い出も、消えて無くならないように大切に覚えて生きていこうと思った。

そんな時、大切な人をいつでも思い出すことができる。私は人間で良かったと思う。



高等学部一年

## 祖父の新鮮な記憶

祖父はよく、「ひかるちゃん今日は学校だったの？」と私に質問をしてくる。私は決まってそうだよと答えると、祖父は「そうだったの、おつかれ様」と言う。私は心の中で秒数をカウントする。一、二、三……。

「ひかるちゃん今日は学校だったの？」

このやり取りが、私が祖父母の家に行くとき日常のこととして繰り返される。そう、私の祖父は認知症なのだ。

祖父が認知症を発症し始めたのは、私が小学三年生の頃だった。何だか最近、同じことを何度も言うなと感じていたが、まさか本当に認知症になってしまったとは思ってもいなかった。当時の私の心情としては、やはり当然のことだが、認知症になってほしくなかった。悲しかった、はずだった。

というのも、祖父の認知症は明るいものだったからである。最近は無邪気になっているというのが祖父に対する私の印象だ。何故そう感じるのか、体験談を幾つか

紹介しよう。

祖父は施設には入所せずに週に二回、昼間に日帰りで利用できるデイサービスという、通所介護サービスに午前九時頃から通っている。

その日が休日の場合、私も見送りをするのだが、その日の光景としてはこうだ。午前九時頃に家までデイサービスの事業者の方が迎えに来てくれると、毎度のように「俺ですか？」と驚いたように言う。それから祖父は、慌てて筆筒に手を伸ばし、靴下を手にしたあと、スピーディーに履き、上着を着て、バッグを持ち、車に乗る。帰宅した時、決まっていつも事業者の方を「いやあ、いい人だなあ」なんて言っている。祖父も楽しそうでありだ。

毎週水曜日と金曜日、私は祖父に「じじ、今日は何処に行つたの？」と質問すると、「何処にも行つてねえよ」と答える。母の情報によると、一番すごい時の答えでは「新商品の説明会に行つてきた」と言っていた日もあったらしい。現役だったころの長い間続けてきた仕事の記憶が一瞬戻ってきたのだろう。

我が家では、二世帯住宅に住んでいる祖父母を招待して、毎年ひな祭りパーティーをしている。ある年のひな祭りパーティーでは、ちらし寿司や蛤のお吸い物などを食べた。

散々楽しんだパーティーの後、私は祖父に今日何を食べたのか質問をしに行くと、「知らねえなあ、コロツケ食ったよ、コロツケ」

……。じゃがいもを使った料理自体食べてないっけうねん！ どっからでてきたん!? と、その日ばかりは流石に私も突っ込んでしまいそうな勢いだった。

最近の出来事では、うちで出来た柿をもぎ終わった後、今年は沢山できたなと思って柿の木を見上げていたら横で、

「来年は少なめでお願いしまあす！」

と柿の木に向かって言いながら、手を二回叩きお祈りをしていた。

祖父のこの絶妙な声かけに正直私は、この方は本当に認知症なのだろうかとも思ってしまった。

いつもポジティブ思考の祖父に無邪気さが加わったことにより、五歳の男の子に見えてしまうことが多々ある。何度でも反応が新鮮な祖父に対して、家族として毎度反応するのは少し大変だが、楽しませてもらっている部分もある。その反面、新しい記憶が一分もたない祖父と一緒にいる祖母は、本当に大変だろう。だから少しでも祖母の力になれるよう、毎日一度は祖母のところに顔を出すよう私も心がけている。

沢山記憶を無くしてしまうが、沢山の笑顔も運んでく

れる祖父。そんな祖父を中心に私の家族はより一層団結しているように思う。

そんなお茶目なじじ、これからもよろしくお願いしますね。

高等学部一年

## 失態の味

事の発端は父にある。たまには奮発して美味しいものを食べよう、と突然言い出したのだ。我が家での奮発するという行為はいつも、ちよつと高い惣菜を買ったり、ファミリールレストランのデザートでパフェを注文したりといった、ごくささやかなものである。ところが、その日の父はなぜかいつもと違い、

「高級イタリアンを食べに行くぞ！」と鼻を膨らませた。賛同する五つ上の兄に対して、節約を心がけている母は、すぐさま一蹴した。しかし、結局父と兄の勢いに負けて、不承不承ながら母も首を縦に振ったのだった。

こうして、私達はイタリア料理店に足を踏み入れたのである。どうせなら美味しいワインが飲みたい、という母の要望により、テレビで紹介されるほどに、ワインが



有名な店を選んだ。とくとくとワインの注がれる音が、響き渡る。眠りを誘うほどの薄暗い照明の中、クラシック音楽が控えめに流れている。周囲をさりげなく見渡すうちに、私は少し胸を高鳴らせ始めていた。イタリアン料理というのは、私にとって完全に異質なものであったのだ。しかし店内を見渡すと、私と同世代の客は他に見当たらない。明らかに自分が場違いであることを、ぴんと張り詰めた空気から感じとった。

席に着いた途端、予め決まっているコースのメニューに目を剥いた。エントラータ、アンティパストなど、世界史の授業で出てくるようなカタカナ表記ばかりで、何を表現しているのか理解が追いつかない。それに加えて並記されている漢字も難しく、母に読み方を聞き、「玉蜀黍」が「とうもろこし」であることを初めて知った。

そうしてメニューを凝視していると、突然、失礼いたしますと背後で囁かれ、慌てて姿勢を正した。料理が運ばれてきたのである。大きな皿とは反比例して、微量の量の、色とりどりのトマトやラディッシュ、アスパラガスが芸術的に盛り立てられた。透明感のあるよく通る声で食事の説明が事細かになされる。その説明さえも、何を言われているのかさっぱり分からなかったが、さも理解しているかのように私は頷きながら聞いておいた。さらに、食べるにあたって問題があった。一ミリのずれもな

く並べられた、さまざまな大きさのフォークとナイフを凝視して考える。どの順番で使えば良いのか。外側から使おうと聞いたことがあるが、普通に考えたら内側からの方が取りやすい。結局、私は、既に食べ始めている家族に小声で確認し、一番外側のフォークとナイフに手を伸ばした。

その後は、生雲丹やトリユフなど、普段の私がお目にかかれない料理を、ひたすら食べ続けた。一口で食べ終えてしまうような料理も、なるべく音を立てないように配慮しつつ、ナイフで細かく切ってから口へ運ばなくてはならない。また、次から次へと料理が用意されていくので、満腹に近づくのも早かった。生雲丹やトリユフの味を堪能している余裕は少しもなく、庶民の舌では何がどう特別なのかまるで判断できなかった。

淡々と食事を続け、いよいよ背筋を伸ばしているのも辛くなってきた頃だ。何の前触れもなくデザートが運ばれてきた。父と母は席を外しており、私と兄だけが席に着いている状態である。私はこれでやっと終わりか、と安堵のためいきをもらし、完全に気が抜けていた。食後のコーヒー、紅茶はいかがですか、と聞かれ、

「ホットティーをアイスでお願いします。」と答える。その瞬間、今まで隙ひとつない店員の笑顔が、僅かに引き曇った。完璧であった空気感にもひびが入る。追いう

ちをかけるように兄の、

「いや、どつちだよ」という指摘が入る。そうしてようやく私は、自分の犯したミスに気がついた。震えながら笑いを堪える兄を横目に、私は恥ずかしさで震えながら再度注文をし直した。

兄とは、私の失態について、内緒にすることで話がついた。父と母に報告したところで私にメリットは何もない。おかげで兄にはしばらくこき使われることになるが、私の失態が封印されると考えれば安いものだ。帰る際にありがとうございました、と頭を下げられたが、紅茶を勧めてきた人の顔を私は直視できなかつた。食の愉しさは値段とは必ずしも関係しない。少なくとも私にとっては、高級な料理をちまちま食べるより、自分に合った店で、食べ慣れた馴染みのある料理を注文し、一緒にいる人と談笑しながら豪快に飲み込む方が、愉しいと感じる。満腹をとうに越えた腹を抱えながら、ファミレスの味が恋しいな、とつぶやいた。

## 高等学部二年

### 一言。

一月三日、夜二十一時。騒然とした、シャッターばかりの駅前。まだ三が日だというのに塾とは。共通テストまであと何日という張り紙に見送られ、私にも大学受験が近づいてきていることを感じ俯く帰り道。集団授業に慣れていなかった私は講師のハツパをかけるような言葉に、そうだとわかっていながらも毎度のように落ち込んでいた。それがこの静けさだと余計にしてみた。かろうじてやっていたカフェに駆け込んでとびきり甘いのを一杯。どうしようもない自己嫌悪をこれで流し込んでやろうと思っていると、一言。

「パーカーかわいいですね。温まって帰ってください。」  
吹っ飛んだ。何もかも。

やっぱりそういうことかもしれない。

高二の総合課題。何でも社会問題について調べなさいとのこと。いろいろと悩んだが、自己肯定感とその維持、上昇の方法。結局またこれになった。社会的な問題と言おうと、どうしても日本人の自己肯定感の低さに目が行ってしまう。私自身がいかにもそこに自信がないかという話なのだが、今回はいつものように日常からヒントを

得た気になって勝手に自己解決するスタイルではなく、海外と比較することで何か掴めないかと調べてみた。結論から言うと、主体性を重視した教育を行い多様性に寛容であるよう云々といった社会環境を日本は見直すべきという話に至ったのだが、もっと簡単なこととして、我が国とアメリカとでの相違が一つ。

日常会話である。アメリカでは会話をする時 *cutie* や *handsome* など相手を褒める意味を持つ言葉を相手との関係性に関わらず呼びかけに利用しており、また、会話をする際には相手のどこかを褒めて会話を始めるのが普通であるようなのだ。ということ、日本人も相手を褒める機会を増やしていきましよう、と言いたいわけではない。ただその一言が精神的に与える影響については是非考えるべきだと思うのだ。

重要なのは褒めるという部分でなく私だけに言われたという事実である。自己肯定感とは承認欲求によって維持される自尊心の問題だ。よって、肯定される褒められるというより、自分という存在を相手からしっかりと認知してもらうことで欲求を満たし、自分で自分を肯定できるようになる、というのが一番良いプロセスなのだと思う。勿論、褒めに重きを置いて、直接的に自己肯定感を上げることも可能だ。だが、そうすると自尊の心というのが全く育たないわけで、褒め言葉が欲しい癖に

卑屈になってまともに受け取れないなど、日本人によくあるジレンマが発生してしまう。現代の自己肯定感の低さは後者が主流になっているからこそ起こる現象だと思われる。

このような問題において、アメリカの日常会話の習慣は非常に有効的に思える。容姿を褒めるのも、相手に合った呼びかけも、他の誰でもないあなたに対する言葉であり、ほんの少しでもその人について考えた上でないといけない行為である。日本の文化とも思える、「おはようございます、今日天気いいですね。」とは訳が違うのだ。

私に、私だけに言われた、というのはどうしようもない喜びなのだ。私があるにいて良いと言う一番の証拠で承認なのだから。これが日本でも習慣となれば私たちは無意識のうちに自分を許し、前を向けるはずなのだ。

と思いついた矢先の一月三日、  
やっぱりそういうことだったのだ。

あの日は、落ち込んだ原因である勉強のことについては何も言われていない。それでも私はあの言葉で大丈夫だと、どうしようもない焦燥や自己嫌悪がすっと消えていくのを感じたのだ。これが日本人が知らないでいる言葉の力なのだ。日常の端端に少しずつでもこのような誰かのためだけの会話が声掛けが生まれていけばいいと

思う。そしていつか意識せずとも当たり前前の日々の中に  
そういつた経験が散らばるような世の中へと変わって  
いて欲しい。褒められることをさも当然と感じつつ、そ  
れでも喜びと感謝を感じつつ、自分自身も無意識に相手  
に同じことをして。そのやりとりをお世辞なんて考  
えもせずに日常茶飯だと、ただそれだけだと感じて、そ  
れが自分の毎日を自分自身の心をどれだけ明るくしてい  
るかもわすれてしまつて生きていきたい。

あなたに読んでもらえてよかつた。  
よい一日を。

## 高等学部二年

### 夜明け

遠くで踏切が鳴っている。疲れた体を椅子に預けて、  
私は少し小さく息をする。マスクをしていると自分の息  
遣いがやたら大きく聞こえる。車窓の隙間からは夜風が  
細く漏れていて、少し寒い。時折車体が軋む嫌な音がし  
て、その度大人たちの眉間の皺はぐつと濃くなる。なん  
だか疲れた。大人はみんな下を向いていて、スマホの明  
かりに照らされた顔が少し怖い。やわらかな隙間風に前

髪を揺られながら、ぼんやり考える。十七歳。私は来  
年、大人になる。なにかから隠れるように、私はぎゅつ  
と目を瞑る。瞼の裏には、あの日々が酷くこびりついて  
いる。

私の小学校は山の上にあつた。四方が緑に囲まれた、  
小さな学校だつた。グラウンドはそこらじゅうが草で覆  
われていて、窓に鳥がぶつかつたり、教室に虫や鳥が入  
つてきたりすることもしょっちゅうだつた。学校の隣に  
は林があつて、林を抜けると柔らかい木の色の教会があ  
つた。自然のなかの生活はいつも魔法みたいだつた。小  
石を池に投げると、水面にじわじわと円が広がつて、静  
かに波に吞まれていく。霜を踏めばシャクという心地よ  
い音がして小さな柱は透明な水に変わる。心地良い季節  
の流れをゆっくり感じて、みんなちよつとずつ大人にな  
つた。一度だけ、カマキリの孵化を目の前で見ることが  
ある。命の誕生の瞬間は神秘だ。小さな網目が揺れて、  
小さな命がわつと溢れる。いくつもの命の始まりへの感  
動と、ショッキングなその映像に、わつと鳥肌がたつ  
た。そして、命は瞬く間に終わる。華やかな蝶も静かに  
朽ちるし、蛙も、トンボも、葉も。みんな静かに終わつ  
た。音がふつと消えるような、そんなほんの一瞬で命は  
終わる。自然は神秘だ。ぼーっと校庭の端に立っている  
と。かくれんぼしよー！ 微かにそんな声が聞こえてく

る。いいよー！ 大声で返事をして、声のする方へ走りだす。じゃあ俺が鬼ね！ その声を合図に、みんな一斉に駆け出す。私はいつも林に逃げ込んで、静かに息を潜めていた。静かな林のなかでは、自分の息遣いが大きく聞こえる。林のなかでしゃがんでみると、異世界に迷い込んだような、なんだか不思議な感じがして胸が高鳴る。たんぽぽでさえも、小さな柔らかい毛が沢山生えていて、違う生き物みたいだ。しゃがんで見ると、アリは力強くて少し怖い。当時の私のブームは、大きな植物を指で弾くことだった。指先にぐっと力を込めると、葉っぱの頭の部分が大きく揺れて踊っているみたいだった。大きな植物を揺らしていると、なんだか強くなったような気がして、何度も何度も指で弾いた。そんなことを繰り返しているうちに

「みつけた！」

そんな声が出て勝ち誇った友達に腕を引かれながら林を出る。校庭には先に捕まった子たちが沢山いて、わーわーと騒がしい。男子うるさいよねー。そんな他愛もない話をしながら、なんとなく空を見ていた。全員が捕まったら、次は鬼ごっこが始まる。みんなで大声をあげながら走って、転んで、泣いて、笑って。そんなことを繰り返して時間が過ぎた。朝の空は透けるような青で、夕方になると繊細なさくら色になる。空のさくら色が濃く

なった頃、母が迎えにきて、友だちに手を振りながら坂を降りる。コンクリートで固まった坂はちよつと硬くて、やわらかい土が少し恋しい。家の近くに着く頃には、空は真つ赤になる。山火事みたいな赤が、家に帰れと訴えかけていた。「もう夏も終わるね」母は独り言のように呟いた。夕日に照らされた母の横顔が、目の奥にジユツと焼きついた。

ガタン。車体が大きく揺れる。もう駅に着いたようだ。私は人の隙間をぬって、静かなホームに降りる。改札を出るともう辺りは暗くなっていて、電光掲示板の灯りが少し不快だった。遠くからは大人の笑い声が聞こえ、コンクリートのザラザラした音に、土のやわらかい感覚がまた少し恋しくなる。息を大きく吸って空を見上げる。真つ暗な空には雲が薄い膜のように張っていた。昔、教会の隅に埃と一緒に張っていた蜘蛛の巣に、なんだかよく似ている。

隅の小さな蜘蛛の巣では、小さな羽虫がもがいていた。雲と蜘蛛の音をそろえたのは、大人なのだろうか。少し進むと、パチンコ店と本屋の間の浅い溝に小さく草が生えていた。普段通りの光景が、何故か少し気になった。夜風に揺られる草を、誰もが目に止めず通り過ぎてゆく。私はたとえ立ち止まった。もしかしたら、大人たちには見えないのかもしれない。吸い寄せられるように

近付いて、膝を抱えるようにしゃがむ。隅では、ぺんぺん草が小さく揺れていた。ぺんぺん草も、もうあの頃のように鮮やかな緑じゃない。私も大人になるのだろうか。指で弾いた。

## 高等学部三年

### 作文文化

小学校から中学、高校まで続けてきた作文を書く文化をこれで締め括ると思うと、清々しくもあり、名残惜しくもある。小学生の頃はテーマが与えられながらも自由に書くということに慣れずに原稿用紙をクシャクシャにしながらその宿題に奮闘していた。中学生の頃は集団の中で個性をむやみに強調しすぎるあまりに主旨のよく分からない文章を書いて先生を困惑させていた。今見返してみると自分の愚かさに赤面する。高校生になつてからは小論文と違い、少しユーモアを交えながら書く楽しさに誘われるようにペンを進めている。

こうして振り返ると十二年間の集大成となる作文がこの様で良いのだろうかと少し戸惑う。しかし、私たちが卒業してしまえばもう「作文」を書くことができない。

仮に書いたとしても、大人が書くエッセーのようなものに過ぎない。よく先生が「今しか書けないことを書くのが作文の醍醐味だ。」と言っていたが、最後の作文となると、「今しか」という条件に合致するようなテーマが決まらない。だからその「作文」について作文を書くことにした。

まず作文を書く時、語彙も多いわけではないが、その限られた言葉の貯金で伝えるのも、それをいかに繋げていくかを考えるのも迷路のように遠回りをする楽しさがある。何を書けば良いのかを思い付かない時に普段考えないようなテーマを頭の中で模索していく作業でも、非日常的な思考を巡っていく感じが嫌いではなかった。

言葉は大抵、場面によって使い分けられていると思う。手紙の言葉、論文の言葉、話し言葉などに区分されるが作文言葉はない。自由な言葉遊びをしているようにだが、他の人の批評に気を取られ、かえって自制してしまっていたと後悔している。例えば「楽しい」のようなありきたりな表現は使わない方が良いとされるが、ありきたりだからこそ活きてくる言葉もある。例えば料理をすることが私の最近の楽しみである。その中で特に楽しさをかき立てられるのが卵をとく場面である。完成品のクオリティーは別として、女子力皆無な私でさえもパティシエのように感じられる。その瞬間に脳裏にうかぶのは

「楽しい」という一言なのだ。ありきたりな言葉こそ、共有できる感覚があると思う。

そして出来上がった作文を見て、私は必ず驚く。自身で書いた文章に思いがけない「自分」が映し出されていることに意外性を感じる。これは他の人の作文を見る時も同様である。作文を読む度に人物データが更新されていくように思える。時々作文コンクールの入賞作品を眺めるのだが、捜真の文集に載っている作文の方が独創的であると思う。何より捜真生らしさが滲み出ている。同じ中高生であるはずだが、一味違うと感じるのも不思議だ。「○○坂」や「愛」を代表とする捜真味の濃い描写は数々あるが、それは捜真文化に長年無意識に浸ってきたおかげと言える。逆に言えば、捜真文化は作文を読むことによっても私の中に根付いたのかもしれない。他校の人は「愛」という言葉を恥ずかしさで包んでしまっているかもしれない。しかし、捜真生は作文で「愛」を躊躇なく書き綴る所が世の高校生らしくなく良い。

だからこそ作文は楽しい。老後、この作文を読み返す時、作文を認めていたときのこの高揚感を思い出し、少し笑みを浮かべていそうだ。ここまでかなり脈絡無しに言いたいことを散りばめてしまったが、「楽しかった」ので、これで「作文」を終わりにします。

## 高等学部三年

### 描く

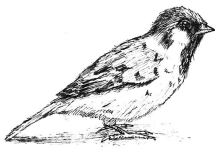
全身に電流が流れたような、そんな感じだった。この楽しさも苦しさも高揚感も、全てが私を強く導く。筆はキャンパスに吸い寄せられ、色の層が画面全体を支配する。重ねて、重ねて、削って、重ねる。一度描き始めたら集中の世界から抜け出すことは許されない。描いて描いて、描きまくれ。

将来と本気で向き合い始めて気が付いたこと。それは「楽しいだけではない」ということだった。好きなことと向き合うことは、好きだからこそその苦しみも伴う。それを初めて知った。何か一つを乗りこえては、また新しい壁にぶつかる。そのくり返した。絵を描くと決意したばかりのあの頃とは全く違う感覚の中にいる。絵を描いて、新しい知識を得れば得る程、自分自身が分からなくなる。学んだことにより生まれてしまった表現の不自由さ。しかし、その不自由さがなければ今の「私」は存在していなかったのかもしれない。学んで、描いてをくり返すうちに、ただ単に絵を描くのが好きだった自分を忘れていってしまう。それでも「絵が好きな自分」を失いたくはないと、自分にとって確かな表現を捜し続ける。

もがいて、もがいて、上も下も分からないまま進み続けたある時、予備校の先生がたった一言「ハイトーン使えるね」と言った。その瞬間までハイトーンを使うことが得意だということに全く気が付いていなかった。ただ好きな色を、美しいと感じる色を追うように描いているだけだった。しかし、その絵にはすでに「私の表現」が当たり前のように存在していた。ふわっと鳥肌が立った。こんなに近くに答えがあったなんて知らなかった。閉ざされていた視界がいつきに開けたような感覚だった。「ほんの少しのことで絵はガラリと変わるんだよ」予備校の先生はよくそう言っていた。聞いていたのに、理解できていなかった言葉。その言葉の意味がようやく分かった。

悩まなくて良い。考えすぎる必要はないのだ。私の表現は、いつでも、私自身の中にある。近すぎて気が付いていないだけで、いつも持っているのだ。しかし、「悩むな」と言われても、きつとまた悩んでしまうのだろう。その時は、それで良い。無駄なことなんて何一つない。一生懸命に向き合っていれば、必ず応えてくれる。誰かが助けてくれる。そう実感した。ただひたすらに、描き続ける。それが今の私にできる最善のことだ。好きな色で、好きな構図で、好きな描き方で、全力で絵と向き合う。それが大切なのだ。

この感情を、何があっても成し遂げたいと思える程の情熱を、目の前の絵に込めて、私は挑む。自分の表現の可能性に。無意識のうちに根づいている固定観念を打ち砕き、新しい世界を見るその時まで、私は描き続ける。





## 2021年度 国語科年間行事

- 5月14日(金) 『文集』46号発刊  
6月26日(土) 有志 漢字検定①  
10月23日(土) 有志 漢字検定②  
12月3日(金) 第3回エーカック記念作文コンクール締切  
テーマ「手」  
1月14日(木) 中1 漢字検定  
2月18日(金) 高一 一日校外研修(博物館見学会含む)  
2月24日(木) 中学部 古典芸能鑑賞 文楽「伊達娘恋緋鹿子」  
2月 中2 文章検定(授業内実施)

### 編集後記

文集四十七号をお届けします。  
二〇二一年度も新型コロナウイルス感染予防のため、延期・中止・変更された学校行事がいくつもありました。そのような状況下での十代の感性や考えが表現されています。ご感想をお聞かせいただければ幸いです。

## 文集

第四十七号

二〇二二年五月 印刷  
二〇二二年五月 発行

発行者 捜真女学校中学部・高等学部国語科  
編集者 捜真女学校中学部・高等学部国語科  
発行所 捜真学院

横浜市神奈川区中丸八  
電話 〇四五(四九)三六八六番  
印刷所 株式会社工友会印刷所

東京都目黒区自由が丘一―三―一九  
電話 〇三(三)三七一七(一〇)一〇三三

〈題字〉 沢野 三郎 (旧教師)  
〈カット〉 (高三)